

インタビュー#003は、社会人8年目の中塩路央視選手と入社2年目の國寄誠選手の二人の捕手にスポットを当てます。

ベテランと若手という立場。育った環境も異なる二人にお話を聞きました。

彼らの現在の心境はいかなるものか?それでは、ご覧ください。

◆写真提供/衛カヤック



**今** 季、中塩路央視は3年間務めた主将の座を、辻(康裕)に引き継いだ。創部当時から主将を務め、チームをまとめ上げた男は苦労の連続だった。社会人野球経験者が少ない創部時、社会人から移籍してきた自分の仕事は「社会人野球の集団」にすることだと思った。監督、コーチが口を揃え「一緒に苦勞してくれ」と言った言葉が胸にしみた。幾度となく選手たちとは衝突したが、「譲れない思い」があった。近年、休・廃部を余儀なくされるチームは少なくない。中塩路自身も廃部を経験した一人だ。「野球ができない苦しみ」を誰よりもわかっていて。学生気分で緊張感のない雰囲気は許すわけにはいかなかった。おのずと口調もきつくなる。後輩たちには、俺の気持ちが届いているのか? 自問自答した日々。不安との戦いでもあった。あれから3年が過ぎ、チームのカラーも徐々に変貌を遂げる。「ドーム出場が、最高で最低の俺たちの仕事」であるという雰囲気が出てきたのだ。創部したころは気付かなかったことが今は分かるような気がする。今年、30歳を迎える中塩路は職場では「シオジ」の愛称で親しまれている。そんな職場の有志が作ってくれた応援用の幟には中塩路の代名詞「熱き闘将!」の文字が刻まれている。職場の仲間同様に、若いチームに浸透したシオジの思い。熱き闘将の思いは、主将を変った今も、しっかりと次世代に、引き継がれている。こだわり続けた「譲れない思い」 野球が出来るという喜びがこの思いを育んだ。今夏、自身8度目の挑戦となる都市対抗。ようやく聖地への扉を開く準備が整った。

## 聖地への道のり 中塩路央視 × 國寄 誠

【捕手・総務部所属】 【捕手・青江サービス工場所属】

**地**

元、岡山理大附高で甲子園に出場した父(薫さん)と兄(徹さん)の影響で、野球をはじめたという誠は、二人に連れられスタジアムを訪れた。薫さんの後輩であり、徹さんの高校の同期でもある徳田善彦(4頁参照)の応援の為だ。その試合とは、社会人のビッグイベント、都市対抗野球大会・岡山・鳥取県予選。はじめて見る社会人野球に誠は衝撃を受ける。それは、一塁走者が盗塁を試みたその時だった。投手から放たれたボールは右打者の外角に大きく反れた切れのあるスライダー。完全に盗塁は成功だと思われたが、捕手は素早く体制を整え矢のような送球で盗塁を阻止した。「これが社会人のレベルなのか!」高校3年生の誠は、レベルの差を思い知らされたのだった。これが、中塩路央視に対する誠の第一印象だ。

翌年の春、誠は、シティライトの門戸を開くこととなるのだから、驚きの連続であった。高校野球は二学年、前後にまたがり計5学年との交流の中、3年間を過ごす。一方、社会人野球は、年齢の幅が広いという特性を持っている。同じポジションの中塩路とは、実に10歳の年齢差があった。これが社会人野球の魅力の一つとも言えるだろう。「短期的な動きやプレーは、若さで何でもなりますが、長期的にコンディションを維持している社会人の選手は、やはりすごいと思いました」データ係や用具の準備など社会人野球1年生として慌しく過ぎた昨シーズン。学生野球は在籍年数が平等に与えられるが、社会人はその1年、1年が勝負となる。誠は、あの日、衝撃を受けた「先輩」をずっと追いかけてきた。「教わる」というよりも自ら「感じる」。社会人野球の厳しさを肌で感じた1年だった。若手19歳。進学した多くの同級生は、学生生活を謳歌していることだろう。雪解けの鮮やかな空の下、社会人としての階段を、また一歩登り始めた誠の姿があった。



### Profile

**なかしおじ・ひさし** ●1981年(昭和56年)8月22日生、大阪府泉南郡出身。180cm・78kg、右投・右打。松山商から本格的に捕手となり近大では大学選手権出場。03年、一光に入社。日本選手権に1回出場した。08年よりシティライトに移籍し、主将を3期務めた。背番号10 29歳。独身。(写真左上)

**くにより・まこと** ●1991年(平成3年)10月11日生、岡山県岡山市出身。172cm・72kg、右投・左打。県立玉野光南高で、3年秋から5番、正捕手として中国大会出場。10年にシティライトへ入社。最年少プレーヤーとして2年目の飛躍を誓う。背番号22 19歳。独身。(写真右下)

★野球部員ブログ「ロッカールーム」好評公開中! <http://ameblo.jp/player-blog/>

